
蝕む者

三耶広嗣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝕む者

【Nコード】

N4251X

【作者名】

三耶広嗣

【あらすじ】

世界を変えようとする「変革者」。それを止め、今の世界を保とうとする「制裁者」。どちらの立場でもない僕はこの戦いに巻き込まれてしまった。だが、立場は違えども無関係ではなく、同じような立場で、僕はこの戦いに傍観するつもりで参戦した。

「人間は、地球上に存在する生き物の中で他の生き物とは異なっている、私は思うんだよね」

「なぜだい？ 人間も動物も植物も、すべての生き物の目的は生きることだ。そのために必要な方法も、生き物によつては様々な条件があるだろうが、目的が一緒なのだから人間だけが特別だというわけではないと思う。」

「本当にそうかな？ 確かに、生き物の目的は生きることだ。あと子孫を残すこともね。だけどね、人間とその他の生き物には、大きな違いがある。まず一つ。人間以外の生き物は『本能』で生きているが、人間は『知性』で生きているということだよ」

「いやいや、別に動物には知性がまったく無いというわけではないだろう。人間にしたって、本能はある。」

「まあ、その通りなんだけどね。でも私が言いたいののはね、『本能』や『知性』があるのか無いのかということじゃないんだ。人間以外の生き物は『本能で生きる世界』、人間は『知性で生きる世界』を構築しているということを言いたいんだよ。動物だつて知性を使うことがあるだろうが、ほとんどの物事は直観に従うだろう。ごちゃごちゃ考えていたら、食べられてしまふし、狙った獲物を逃がしてしまふからね。『本能』の創りだした世界。それは生命が誕生した時から存在する弱肉強食の世界、自然界だ」

そして人間の、『知性』の創りだした世界は、この社会か。
「そう、正解だよ。知恵を蓄え、物事を経験し、秩序を作り、それに従う世界。それが人間の生きる、『知性』の世界さ」

でもだからって、『本能』ではなく『知性』で生きているから人間が優れているというわけではないだろ。

「あはははは。そんなの当たり前じゃないか。私は別に人間が特別だと言っているんじゃないんだよ。変わった生き物だと言いたいんだ」

なんで？ 人間は『本能』の世界の住人ではなく、『知性』の世界の住人だ。でも結局のところ目的は変わらないじゃないか。

「そうだね。目的は両方とも同じだよ。だけど、それでも私が、人間は異なつた生き物だと言っているのには他に理由があるんだよね。さてここで君に一つ質問。『本能』の世界には、『本能』の世界を『知性』の世界に変えてしまう生き物はあると思うかい？」

うむ。難しい質問だな……。そうだな、チンパンジーなんてどうだろう。あいつらならもしかしたら進化していくと人間と同程度の『知性』を身に付けるかもしれないし。

「まあ、ありえない話ではないね。でもそれじゃあ変わるのはチンパンジーの世界だけだろう？ 他の『本能』の世界の住民である生き物達にまでは影響しない」

じゃあ人間にはそんな奴がいるとでも？

「うん。いるよ、そんな迷惑極まりない人間が。そいつらがもう一つの人間が異なる理由、というよりこつちが主な理由だね。『知性』の世界だからなのか、人間だからなのか、理由はわからないけど、そいつらは生まれてくる。『知性』を『本能』へと変えてしまうかもしれない人間、そこまではいかにしても、社会の仕組みを変えてしまう人間がいる。そいつらはね、社会では通用しない世界を持っていて。認められず、通用せずに生きて死んでいくだけならいいんだけど、そいつらは、自分の世界を他人の世界に侵食させるんだ。そんな生き物がこの人間の世界には生まれてくる。それが他の生き物と人間の違いだよ。世界に拒絶されてもなお世界に抗おうとする存在、そいつらのことを私達は『変革者』と呼んでいる」

0 (後書き)

初めまして三耶広嗣です。今回初めて小説を書いて投稿してみました。とても不安定な文や設定ですが、連載しながら上達していきたいと思っています。

こんな作品ですが少しでも目を通していただければありがたいです。

「う、ん……」

僕は眠っていた体を起こす。今日は九月一日、月曜日。夏休みが明けてしまった日である。

「今日からまた学校か……、だるい」

時刻は午前七時。僕はベットから体を降ろし、部屋を出て食卓へと向かった。冷蔵庫から昨夜の余ったおかずを取出した。テーブルの上には、白米とおかずとお茶が置いてある。朝飯の準備完了。

「いただきます」

僕の名前は、未那形崇^{みなかたしゅう}。一人暮らしをしている高校2年生だ。家はアパートやマンションではなく普通の家だ。

だがこの家には自分以外に住んでいる人がいない。昔はここで両親と暮らしていたが、高校へ入学する時に少々いざこざがあつて今は遠く離れたところに住んでいる。両親とは、中学を卒業したあたりから仲が悪くなっていったのだ。その結果、両親は出て行った。

しかし、両親が出てつて少し日が経った頃、両親から仕送りが届くようになった。許したわけではないだろうが、やりすぎたと少し反省したのかもしれない。僕もその頃には大して憤りを感じてはいなかった。

「ごちそうさま」

朝食を終え、食器を片づけて制服に着替える。

着替え終了。玄関を出て家の鍵を閉め、退屈の巣窟である学校へと向かう。

僕の住んでいるこの町、根倉町^{ねくら}はいたって平和な町だ。特に事件や問題が起こることは滅多にない。この町の南の方角以外は山に囲まれている。そして南の方角には薪菜市^{まきな}と呼ばれる都市がある。

薪菜市は根倉町とは違い、あまり平和なところとは言えない。大

きなデパートやゲーセン、遊園地など充実した店や施設が多くあるが、トラブルに事欠かない。不良同士の喧嘩、悪戯に盗みと、騒がしい町だ。夏休み中には、殺人事件が起きたりもした。あの町には、あまり行きたくはない。

僕は家を出て北に向かう。ここから北へ約二十分歩いたところに学校はある。学校までは、坂も少なく、ほとんど平坦な道で、登下校中に苦を感じることはない。

「ふむ、いい天気だ」

今日の天気は雲一つ無い快晴だ。気温は夏休みが終わってもまだ高く、暑い。

それにしてもほんとにいい天気で、これから退屈な時間が始まるというのに、そんなことがどうでもいいように思えてしまいそうだ。何かいいことでも起きるんじゃないかとも思ってしまう。というか起こってほしい。今年の夏休みは、最悪だったからな。

初めの一週間で宿題を終わらせて、あとは家でのんびりするか、たまに外をぶらぶらするかで残りを過ごして終わるのが、僕の夏休みの過ごし方だったが、ある女のせいで今年は最悪の夏休みとなった。

と、心の中で今年の夏休みについて愚痴りだそうと思ったとき、目的地である学校が視界に入ってきた。

私立六辻むしじノ学園。ここが僕の通っている学校だ。

この学校は、北校舎と南校舎の二つの校舎があり、両方とも四階建てで、二つの校舎の間には中庭がある。

北校舎に、理科室や家庭科室、音楽室など、特別な授業や特定の部活動が使うような施設が集まっている。食堂や図書室も北校舎にある。で、普通の教室や職員室、保健室は南校舎に集まっている。

二つの校舎の西隣には、体育館と、部活動や同好会のための部室棟がある。

偏差値もそんなに高くなく、特に変わったところもない普通の学校だ。（ちなみに僕がこの学校を選んだ理由は、家から近いからだ）

僕は、学校の東側にある校門を抜け、南校舎にある昇降口に向かうと

「よっ。おひさー、崇」

昇降口に入ったところで、一人の男子生徒に声をかけられた。

「おう、正志^{ただし}。久しぶり」

こいつの名前は目黒^{めくろ}正志、友達だ。中学、高校とサッカー部に所属しており、この学校には、スポーツ推薦で入った。背は高め（百八十以上はあるだろう）で、イケメンで、女子にモテる。頭のレベルもそこまで悪くもない。ちょっとチャライが、悪さをしたり、誰かにしょっちゅう絡んだりとかはしない。気さくで親切で積極的な、出来のいい人間である。こいつとは中一からの付き合いで、よくゲーセンとかで一緒に遊んでいる。

僕たちは一緒に、三階にある自分達のクラスに向かう。ちなみに、こいつとクラスは一緒。

「おい崇」

「なんだ？」

「おまえさん、今回の夏休みはえらく充実してたんじゃないのかい？ うん？」

正志が楽しそうな表情で僕に尋ねてきた。

「……なんでそんなことを聞くんだ？」

「『なんで』って、お前さん俺の誘いをすべて断ったじゃないか。

きつと、俺が他の奴らとわいわいやってる時に、お前は愛する彼女とイチヤイチャしていたんだろ？」

「わいわいやってんなら僕がいなくても別にいいじゃないか。あと、僕に彼女なんていねーよ」

「ほう、じゃあなんで断ったんだ？」

「……いろいろ用事があつたんだよ」

「彼女との？」

「さっき彼女はいないっていったよな？ えーと……、とにかく、あんまり言いたくないんだよ。俺だって好きで誘いを断ったわけじ

やないんだ。今度、何か埋め合わせするから許してくれ」

「ふ〜ん……。言いたくないならしゃーねーか。埋め合わせもあるみたいだから、まあ、許してやんよ」

深く言及せず、適当に許してくれる。ほんと、こいつが友達で助かる。

「ありがとう。ほんといい奴だなお前」

「わはははは！ やめろよ！ 照れるじゃねーか！」

バンバンと俺の背中を叩く。結構痛い……。

喋りながら歩いていっているうちに僕たちは階段を上り終え、自分達の教室の前に到着していた。

二年B組、ここが僕達のクラスだ。扉を開け、中に入ってみるとすでにほとんどの生徒が中にいた。

「ういっす！ みんな久しぶり！」

と、正志が元気よく、クラスのみんなに挨拶をする。

おーっす正志！ 久しぶりー！

目黒君おはよう！

みんなも返事を返し、正志に駆け寄っていく。みんなの人気者、正志君である。

みんなに挨拶をした正志は、真ん中にある席に向かい、みんなと談笑中。僕は直行で、一番後ろの窓際にある席に座った。この席はいい。周りと世界が離れているように、静かに感じる事ができる。ポーっとするには最高の環境だ。

正志はクラスの連中と夏休みの思い出話をしているようだ。どうやら正志はクラスの大半の連中と夏休みに遊んだらしい。部活もあるのだから、一体どうやって短い間に大人数と遊んだんだろう。部活をやって、みんなと遊んで忙しい奴だな。まあ、忙しくてもみんなに付き合うから人気があるのだからうけど。

「みんな、おはよう」

と、扉から長い黒髪の女子が入ってきた。

あ、阿左波さん、おはよう。

おはよう。

おはよう、阿左波さん。元気だった？

正志が入ってきた時と同じように、みんなが今教室に入ってきた女子生徒に挨拶をする。

阿左波六根、それが彼女の名前だ。彼女は、春の始業式の日この学校にやってきた転校生である。転校の理由は、家の事情というお決まりのパターンだが、彼女の場合は少し違うところがある。それは、彼女がお嬢様だということだ。

阿左波家。はっきり言って、彼女の家が何をやっているのか知られていない。彼女が家のことについて語らないので当然である。なので、『大きな企業の社長令嬢』とか『社会の裏で活躍している、表に行動が知られることのない家の娘』など、多くの噂が立っている。ならどうして彼女がお嬢様だと知れ渡っているのかというと、それは登下校時、黒い高級車と思われる車に乗っており、執事と思われる人物が送り迎えをしている。どう見てもお嬢様である。

「未那形くん、おはよう」

「おはよう、阿左波さん」

彼女は僕に挨拶をして、隣の席に腰かけた。僕の隣が彼女の席だ。彼女は、はっきりいって美人の部類に入る。顔立ちや雰囲気がお嬢様だからなのか凛としており、それでいて、活発で明るく、周りからもよく慕われている。転校してきた時も、自分からみんなとよく接し、すぐクラスに馴染んだ。

そんな美人が隣の席ならば普通の男子なら喜ぶだろう。僕だってうるさい友達よりも、美人が隣の席にいる方が花があったといいと思

う。だけど、僕はこんな美人が隣にいても素直に喜ぶことができない。なぜなら、彼女が僕の夏休みを引つ掻き回してくれた張本人だからだ。

「まったく、僕の夏休みを返してほしいよ……」

「うん？ 夏休みがどうかしたのかい、未那形君？」

しまった。心のつぶやきのつもりが、どうやら口に出してしまっ
たらしい。

「なんでもない」

「なんでもない？ いやいや、私には『夏休みを返してほしい』と聞こえたんだけどね。何かあったのかい？ どうやらせつかくの夏休みを、授業とテストを終え、宿題さえ終わらせれば安息でいられる夏休みを失ったと思われる。大変なことにでも巻き込まれたのかい？」

この野郎……。

僕は怒りを抑えることに集中した。

「その大変なことに巻き込んだ張本人が何を言っているのやら」

「おや？ 私が巻き込んだんだっけ？」

「知ったかぶるな」

「おやおや、お怒りのようだね。冗談だよ、冗談。夏休みの件については、悪いとは思ってないよ」

思っていないのかよ。

「あれは事故みたいなものじゃないか。誰も予想だにせずに起きたことなんだ、しょうがないだろう？」

「いや、絶対お前は知っていただろ って、おい」

阿左波は急に席を立てて教室の外に出て行こうとする。

僕は彼女を止めようとしたが

「おい崇、もうすぐ始業式だから体育館へ行くぞ」

と、正志に言われて教室の時計を見たら、あと少しで始業式の始まる時間だった。クラスのみんなも移動し始めている。

あいつに夏休みについて文句を言いたかったが、始業式が始まるな

ら仕方ない。またあとで問いただそう
そう思つて、僕は教室をあとにした。

「ふあゝあ」

退屈だ。なんでまったく心に響かない校長の長話を聞かなければ
ならないのか、疑問でならない。

話している側である校長は、こんな長話をしている疲れはないのか？
それに、自分の話している言葉が生徒達に刻まれていないことを
気付いているのか？ もし気付いていながら話し続けているとしたら
大したものである。

話し続けていれば、自分の話に耳を傾けてくれると思つているのか、
それとも生徒達に自分の言葉がすでに伝わつていなくても思つて
いるのか、どっちにしる僕には全く響いていないので、さっさと
やめてほしいものだ。

これにて、校長先生のお話を終わります。続いて生活指導の先生
からお話があります。

ようやく校長の長話が終わったか。まだ今からも話があるみたい
だが、校長よりは短いはずなのですぐ終わるはずだ。

「えー、みなさん、夏休みはどうやら何の問題もなく過ごすことが
できたみたいですね。ですが、楽しかった夏休みも、もう終わり授
業が再開します。心を引き締め、服装など乱れなく、授業に集中で
きるようにしてください」

ふむ、特に変わった話もなさそうだ。この分ならもうすぐ終わる
だろう。

「そして最後にみなさんに一つだけ注意してほしいことがあります。
それは夏休み中に薪菜市で起きた殺人事件についてです」

だが、もう終わりを迎えると思つた生活指導の話にはまだ続きが
あつた。

「みなさんが夏休みに入って一週間後、薪菜市で三日間で五人の人間が殺されるという恐ろしい事件がありました。その後の犯行は行われてないませんが、まだ犯人は捕まっておりません。なので、夜遅い時間まで外をうろついたりするのは大変危険ですので、出歩かないようにしましょう」

そう。夏休みの間に五人もの人間が殺されたのだ。

事件がまず最初に起こったのは、八月八日である。薪菜新内にあるとある空き地で、四十五歳の会社員、男性が、刃物で切り刻まれた状態で発見された。そして翌日、今度は河原で若い男女の死体を発見。さらに翌日、路地裏で一人の男性が、住宅街の道端で一人の女性が殺害された。全員が切り刻まれた死体で、夜中に行われた犯行だった。

特に被害者達に関連性はない。二日目の二人の被害者は恋人同士だったらしいが、それだけである。

警察は通り魔によって行われた犯行として捜査を始めたが、なかなか犯人を捕まえることができなかった。

しかし、三日間の犯行以降、半月以上経ってもさらなる被害者が出ることはなかった。

それでも警察は、必死に犯人を突き止めようとしたのだが、奮闘も虚しく、まったく手がかりすら見つけれなかったらしい。

街の住民にとって事件はもうほとんど記憶から消えかけているみたいだ。

まったく、人つてのは楽観的な思考を持つ者が多い。通り魔殺人が起きたっていつのにもそれでも夜の街を歩く人間がいる。自分は被害に遭わないだろうとか、そんなことなど関係なく夜の街で遊びたいなど、僕にはまったく理解できない。死の恐怖の舞う街を訪れるなんて、死ににいくのと同じである。

僕はそんなことで命を落としたくないので、家の中で大人しくして残りの夏休みを過ごすという選択肢を選んだ。だがしかし、その選択肢は阿左波六根のせいで拒絶されることになった。

なんと彼女は僕に、

『事件の犯人を捜すから手伝え』と言ってきたのだ。

冗談じゃないと思った。当然だ、なんで僕がそんな探偵じみたことをやらなくてはいけないのか、そもそも、まったく関わりのない僕にいきなりそんなことを頼んでくるのかが（そのあと有無を言わず現場に連行されたので、頼まれたというよりも強制だった）わからなかった。

つまり、今回の夏休みが最悪だったのは、彼女によって強制的に犯人探しを手伝わされたからなのだ。

「いや、通り魔殺人の犯人探しはほんと大変だったね。だってまったく尻尾を出さないんだもん。証拠も全く残さないし、まるで空気のような犯人だったよ。あんな死体以外何も残っていない現場じゃあ、警察も犯人を見つけられないよね」

体育館から戻ってきた僕たちは夏休みに起こった事件について話していた。

犯人探しの件について文句を言おうとしたが、ほんとに彼女は悪いと思っておらず、反発する気が失せてしまった。なので、ただの思ひ出話みたいな感じで話が進んでいく。

夏休みの思ひ出が、殺人事件の犯人探しって、明らかに異常だよな……。

「それでも、お前は犯人を追い詰めたじゃないか。警察ができなかったことをやってのけるなんて、ほんと何者だよお前は」

「結局逃げられちゃったけど。というよりも、君が逃がしたと言った方がいいのかな。あと少しでもあいつを捕まえることができたというのにね」

そう、彼女は警察でも見つけることのできなかった、死体以外何も残さなかった犯人をもの見事に追い詰めて見せたのだ。

「しょうがないじゃないか。僕は最近まで普通の高校生だったんだぜ？ なのにいきなり未知の世界に引つ張られてきてどうしたらいいのかわからないのは当然のことだろ」

「それでも、止めようともせず、わざと逃がしたというのはどうなのかね」

「だから、僕は普通の高校生だって言ってるだろう。そういう荒事は向いていないんだよ。そういうお前だって、あの後捕まえることができたのにそうしなかったじゃないか」

「確かに、あの後すぐにも追えば捕まえることは簡単だっただろ

うけど、すぐに体勢を立て直すことができなかつたんだよ」

「……」

わかっている。すべては僕が原因で犯人を逃がしたっていうことは。でもしょうがないじゃないか。相手は殺人犯で、僕はただの高校生なんだ。何もできなくて当然なんだ。なのにどうして僕が負い目を感じなきゃいけないんだ……。

「ようお二人さん、仲良く談笑中だったみたいだけど何を話していたんだ？」

と、正志が話しかけながらこっちに来た。

「やあ目黒君。なに、夏休みの思い出話をしていただけだよ」

阿左波は、殺人事件の話をしてたは思わせないよう、楽しい思い出話していたということに切り替えた。

というか、僕は結構、真面目な感じで話してた気がするんだけど、なんで仲良く話してるように見えるんだよ。

「ふむふむ、夏休みの思い出ね」

正志は僕の方に、明らかに面白がっているような視線を向けてきた。

「俺はどうやら二人の楽しい会話を邪魔してしまったようだな。申し訳ない、邪魔者は退散するよ」

意味不明なことを言いながら正志は僕達の前から、立ち去ろうとする。

だから一体どこが、仲良く楽しく話している風に見えたのだ……。

「別に邪魔になつてないから入っても問題ないぞ」

「ならお構いなく」と、いききたいところだが、どうやら第二の邪魔者が来たみたいだな」

だから邪魔になつてない、と言おうと思ったが前の扉から一人の男性が入ってきた。どうやらこのクラスの担任がホームルームを行うためにやってきたようだ。

正志は自分の席に戻っていった。他の生徒も席に着き始めている。「えー、それでは夏休み明けのホームルームを始めたいと思います」

抑揚のない声で教師が話し始めた。ここからは、また特に意味のない話が始まるんだなと思い、僕は教師のいる方ではなく、窓の外に視線を移した。

空は相変わらずの晴れ模様である。

教師の話の内容は、さっきの始業式であつた話と大して変わらなかった。

夏休みで浮かれた気分を戻そうとか、宿題はやってきたとか、通り魔に気を付けるとか……。まあこっちの方が時間が早くて助かる。校長もこれぐらいの時間で話してほしいものだ。

で、今僕は鞆を手に持ち、帰ろうとしているところである。

今日は、始業式とホームルームがあるだけで、授業は明日からである。よって昼から自由だ。

他の生徒達も、余つた時間をそれぞれで消費しようとかささと帰宅していく。中にはいつまでも友達同士で喋り続けている者もいるようだ。

「へい崇、久々に一緒に帰ろうぜ」

と、正志が僕に話しかけてきた。

「お前、今日部活はないのか？」

「おつよ、明日から本格的に再スタートだ」

どうやら今日はないらしい。特に問題があるわけではないので一緒に変えることにする。

僕達は教室をあとにする。

「ところで、朝から気になっていたんだが」

唐突に正志が話し始めた。

「阿左波さんとは一体どういう関係なんだ？」

「は？ どういうつて言われても……」

「とぼけなさんな。俺が気付かないうちにあつという間に進展してるじゃないの。ぶっちゃけ付き合ってるの？」

いきなり何を言ってるんだこいつは？

「そんなわけあるかよ。あいつと俺が釣り合うなんて百パーないから」

「ま、付き合っていないにしても、夏休み前まで何の関わり合いの無かった二人が夏休みが明けた途端、仲良くおしゃべりなんてしてたら気になるじゃん？」

「あ……」

そうだった。あいつと親しく(?) なったのは事件があった時、つまり夏休みのことだったんだ。だから正志や周りの人から見たら不思議に映るわけだ。

「……夏休みの間にいろいろあったって言ったろ？ そこにあいつが関わっていて、そこらへんでちよっと話すようになっただけ」

「ほほう、一体何があったんだ？」

正志が期待でいっぱいという目でこっちを見てきた。どんな展開を待ち望んでいるのだこいつは……。

「残念だけど、前も言ったけど、その件についてはノーコメントで」

「ああ、そうだったか。ちえっ」

「そんなに悔しがることかよ」

「お前に新しい友達ができたんだから、これはめでたいなと思った次第ですよ」

「別に友達じゃないけどな」

あいつとは、仕事の関係みたいな感じだしな。

ちなみに、あいつはホームルームが終わったらすぐに用事があるとかで帰って行った。

「なぐんだ、そういう関係に至ってるわけじゃないのか。つまりんでも一応、夏休みは女の子と一緒に過ごしていたってのは当たったな」

「甘い時間なんて微塵もなかったけどな」

僕は靴を履き替え昇降口を出た。そこに

「やつほー先輩方！ お久しぶりでーす！」

元気な声が僕達の耳に響いた。

僕達の前に女の子が手を振ってやって来た。肩らへんまでに伸びた髪に小柄な体で可愛らしく、明るい雰囲気纏っている。肩にかけている鞆にはウサギの小さなぬいぐるみが付いている。

彼女の名前は三月綾女、みつきあやめ一つ年下の後輩である。

「おう、三月。夏休みは盛り上げてくれてありがとうな」

「お礼には及びませんよ目黒先輩、私も楽しかったですし。それよりも……」

三月の視線が僕の方に移る。

「未那形先輩、なんで夏休み私と遊んでくれなかつたんですか」

「……別にお前と遊ぶことが義務付けられているわけではないんだけどな」

「ぐはっ、ひ、ひどいです。先輩が私の純情を弄びました……」

「僕はそこまで鬼畜じゃねーよ。あ……、すまなかつた三月、夏休み中は立て込んでいたんだ」

「む」

ふてくされる三月。そんな不満そうな顔されても困るのだが……。

「まあまあ三月、許してやんなよ。祟も大変だったみたいなんだから。それに、今度埋め合わせしてくれるって言ってるしな」

正志がフオローに入ってくれた。助かった。

ただ、埋め合わせをすると言ったのは正志にんだけど、まあこの場合は仕方ないか。

「ムムム、わかりました。その埋め合わせとやらで許してあげましょう。で、何をやってくれるのですか？」

「まだ特に決まってないけど、そうだな……何か飯でも奢るとかでいいかな？」

「OKです！ それで日時と場所は？」

「それは後で決めておく。決まったら教えるからそれまで待っていてくれ」

「わかりました、楽しみにしてますー！」

帰ってからやることができたな。早めに決めないとまた何か言わ

れるかもだしな。

「よし、話もまとまったことだし帰りますか」

「了解です！ さっさと帰って、昼寝をするのです！」

さつきから立ち止まって話してたし、そろそろ動き出すか。

僕達は校門を出て登校した時と逆の方向に向かう。二人とも途中までは同じ帰路で、10分ほど歩いたとこれで、それぞれバラバラになる。

そしてそのまま何事もなく途中で解散し、僕は帰宅した。

昼飯（また昨晚の残り物）を終えて、僕はベットに寝転がり約束した埋め合わせについてどうするか考えている。まあ、食事する場所はファミレスあたりでいいだろう。その後か前にカラオケ（俺は歌わないけど）やゲーセンにでも行って遊べばいいだろう。日にちは今週の日曜日あたりでいいかな。金もきつと足りる……はずだ。

カラオケ代はどのくらいなのか大体予想はつくのだが、飯代は皆目見当もつかないな。正志はスポーツマンだからエネルギー回復に大量の栄養を摂取する、それはわかる。だがどういうわけか、三月の奴は別にスポーツマンでもない、小柄な女の子なのにどうしてか大食いなのだ。それでいて太りもしない、女性にとって羨ましい体質なんだろうな。

つまり、飯代で僕の財布の中は多大のダメージを受けるわけか。

次の親の仕送りまで持つといいんだが……。

まあ、罪滅ぼしみたいなものなんだし、ダメージ無しで終わらそうという方がおかしいのだろう。

というわけで、予定も決めたことだし、あとはあいつらにも伝えて了承を得ればいいしな。これからやることもないし、このまま寝てしまうか。

そう思って^{まぶた}瞼を閉じ、意識を落とそうとしたところに、僕の携帯から着信音が流れ出した。体を起こしてベットの上にある携帯を拾う。

「誰だ？」

三月の奴が愚痴るために電話をかけてきたのかと思ったが違うようだ。携帯を開いて相手の名前を見てみると、そこには阿左波という文字があった。

その名前を見て僕は、ひどく最悪の気分になった。まだ三月の愚痴電話の方が数倍マシだ……。

あいつから電話があるときはたいていひどい目に遭うと決まっている。

だが、電話に出ないのはさらにひどい目に遭わされそうな気がするので、恐る恐る出てみることにした。

「やあ末那形君、ちょっと君にお願いがあるんだ」

「その言い方、あの時のと同じで、不吉な予感しかしないんだが」「運命でも感じたのかい？」

「死神とお供する運命をな。で、やはりまたそっちの件？」

「ピンポーン！正解です」

またか……。学校が始まったばかりで、ただでさえ鬱になっていくというのに。

「というわけで、迎えを送るけど、今どこにいる？」

「自宅にいるよ」

「わかった。じゃあそこで待機しといてね」

「場所は？ 今度はどこなんだ？」

「薪菜市内にある和泉マンションだよ。まったく、派手にやらかしてくれだよ」

「わかった、迎えが来るまで待つてるよ」

僕は電話を切り、再度ベットに寝転がる。

また奴らか。こつも頻繁に現れてくるとか迷惑以外の何でもないな。だけど、奴らを追って仕留めるのは阿左波の仕事で、僕は出してやることもないんだし、別にいいか。

僕はそのまま意識を落とすことにした……。

「変革者」。

阿左波は奴らのことをそう呼んでいる。

奴らは異能の力を持っている。そして他人に対して大きな影響を与える。阿左波いわく、人間の変種のようなものらしい。

その変革者を捕獲、退治する役目を持っているのが彼女の家系だ。彼女が家柄について語らないのはそのためである。異能の者達を退治している、なんてことをみんなの前で言えるわけがない。言っても、変な目で見られたり馬鹿にされるだけだ。

彼女はただの殺人犯や強盗を追いかけたりはしない。事件に関わるのはそこに変革者が絡んでいるからだ。よって今回、僕が呼ばれたのも恐らくそれ関係だろう。

僕は彼女が寄越した車に乗って（意識を落とそうとした三十秒後にやってきたので、寝ることはできなかった）件のマンションに向かっているところである。

車の中には僕と運転席に彼女の執事である時沢ときさわさんがいる。

「……………」

「……………」

……………とても気まずい。

時沢夏鐘なつかね。阿左波六根専属の執事で、歳は約六十歳ぐらいのご老人。寡黙な性格で、必要な時以外は言葉を喋らない。でも、仕事は完璧で無駄な動作も少ない、経験値の多そうな人だ。

僕はこの人と何度か会ったことはあるのだが、会話をしたことはない。言葉を交わしたことはないとは言わないが、それでも内容はお迎えに上がりましたとか、目的地まで案内しますなど、挨拶や一言だけで、会話とは言えない。

そんな人と二人つきりというこの状況

キツ過ぎる。

よし、このまま黙っているのも空気が悪いので、久々に僕から話

しかけてみよう。

「あの、今日はいい天気ですね」

なんてつまらない言葉なんだろう……。しかし、これですらも空気が変わってくれば。

「確かに良いお天気ですね」

「やっぱり無理ですよね……。」

結局、目的地まで波風立たずに車は進むのであった。

「ふむ、ようやく来たようだね」

マンションに到着して現場の部屋の前まで時沢さんに案内してもらつと、そこに阿左波が待っていた。

「夏鐘、ご苦労。私達が戻るまで、車で待機してなさい」

「承知しました、六根お嬢様」

そのまま時沢さんは車へと戻っていった。

「さて、現場検証といこうかね」

阿左波は扉を開け中に入っていく。

ここは十五階建てである和泉マンションの九階にある部屋の前だ。表札には忌田いみだと書いてある。

僕も阿左波に続き部屋に入っていく。玄関で靴を脱ぎ廊下を歩いて行きリビングに着いた。阿左波はリビングにある椅子に腰かけた。リビングをざっと見まわしたところ、阿左波の腰かけた椅子とテーブル、三ニインチ程度の液晶テレビがあるぐらいで、特に変わったところはなく、普通の家と変わりない。だが、家の中に人は一人もいなかった。

「こんな普通のお宅に何があったんだっていうんだい？」

「さあ？ なんだろうね」

「なんじゃそりゃ。」

「何か事が起きたから勝手に人様の家に侵入したのじゃないのかよ」「うーん、起きたというより起きなくなった、ってところかな」

「どうということだ？」

阿左波の言葉を理解できず、考え込んでいると阿左波が説明を始めた。

「今回の目標は、忌田徹、十七歳、三ツ木高校二年生。両親と妹の五人家族で暮らしている。」

「いたって普通の高校生？」

「いいや、かなりの迷惑男だね。忌田徹の趣味は音楽を聴くこと、しかも大音量でね。そのせいでこの周りの部屋から苦情が来ていたらしい。家族もかなり迷惑していたらしいが、この男は全くいうことを聞かず、家にいるときは常に音楽を流していたらしい。その右の扉の奥が彼の部屋だよ」

阿左波はさつき歩いてきた廊下の、こっちから見て右側にあるドアを指さした。

僕はその部屋に足を進めた。ドアノブを捻りドアを開ける。

僕は中の状況を見て少し驚愕した。

部屋の中が空っぽに近い状態だったのだ。

部屋にあるのは勉強机と椅子、そして空っぽの棚。それ以外は何もない。

音楽を大音量で聴くのが趣味である男の部屋にしては、音楽プレイヤーやスピーカーなどのオーディオ機器が一つもない。

「どういうことだ？ 親が音楽関係の物をすべて処分でもしたのか？」

「違うよ。隣人の人に聞いてみたところ、約一週間前から、いつも聞こえていた騒音がこの部屋から聞こえなくなったらしい」

彼女も椅子から立ち上がり部屋に入ってきた。

「静かになったことに隣人は安心したのだが、あまりにも静かすぎたため、気になって訪ねてみたところ、インターホンを鳴らしても反応が無い。その後も二、三回訪ねても音沙汰なし、少し気になってきたらしい」

「は？ 家には誰もいなかったのか？ 一週間も？」

「ああ、そつだよ」

どうしてそんな状況になったのか、まったく想像つかない。忌田徹の流す音楽が止んだだけならわかるけど、なぜ家族全員がいなくなるんだ？

「さて未那形君、この家に何かあると思うかい？」

「そういわれ、部屋を見回したり、目を閉じてみたりしたが特に何もなかった。」

「……特にない、と思う」

「そうか。じゃあもうここにいっても意味はなさそうだな」

「と言ってさっそうとして部屋から外に出ていく彼女。僕も慌てて外に出る。」

「さて、次からはどう動こうかね」

彼女はそのままエレベーターに向かった。

「ん？ おい、鍵の錠を閉めておかなくていいのか？ 元の状態に戻しておかないとめんどくさいことになるんじゃないのか？」

「元の状態というならあのままでいいんだよ。最初から鍵は開いていたんだから」

「そうだったのか。てっきりお前が勝手に開けたのかと思ったよ」

「失礼な、開いているものを開けることなんてできるわけないだろう？ 君は私を馬鹿にしてるのかい？」

「そっちかよ。勝手に人の家に踏み入ることに罪悪感はないのな。」

まあそんな人間性をこいつが持っているとは思ってなかったけども、僕達はそのままエレベーターで一階へ降り、時沢さんの待っている車へ向かった。時沢さんが車のドアを開けてくれたので、よくそこまで気を配れるなと感心しながら車に乗った。

車はそのまま僕の家に向かって走っている。その間に彼女と今後の動きについて話し合うことになった。

「目標が行方不明となると何もできない。動きがあるまで様子見だね。手がかりもなしに捜し回ってもいいけど、学校もあるし成果は期待できないと思ってくれ」

「ああ、わかった。僕も空いた時間に捜してみるよ」

「オーケー。まあ、今までと同じ感じに、ね」

結局、方針は今までの時と同じ流れになった。次に考えるのは、目標がどんな相手なのか、である。

今回の相手は、音楽の世界に入り浸っていることから、それに関する何かかと思っただんが、家族までいなくなるっていうのはよくわからない。

「なんで家族までいなくなったのだろう」

「まあ予想だけど、自分の世界に浸るには家族が邪魔だったと考えるのが妥当だね。実際、両親が何度も注意してみただし」

「じゃあ、そいつの家族はもう」

「可能性はあるけど、まだその段階だ。必ずもそうとは限らないよ」とにかく一刻も早くそいつを見つけなければ、家族が生きているかもしれないとしても手遅れになるかもしれないってわけだ。

と、車が停止し、時沢さんが僕側の扉を開けてくれた。どうやら僕の家に着いたみたいだ。

「それじゃ、いい知らせを期待してるよ」

「ああわかった」

そして阿左波はそのまま車でどこかに去って行った。

僕はそのまま家に入り、ベットまで一直線に向かった。そのままベットに倒れこみ、これからどうするかを思考しながら眠りに落ちて行った。

次の日、今回の目標を捜す手掛かりは僕らが探し出すまでもなく、その情報は向こうからやってくるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4251x/>

蝕む者

2011年12月1日00時56分発行